

異世界憑依転生したので原作キャラを救いながらヒーロー目指しま
す

燈火燃えるは英雄となる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここに一人のヒーローを志す少年がいた。

少年の名は「緑谷 出久」彼は憑依転生者だった。

彼は悔やんでいた。

それはなぜか。それは……

原作だとライバルのはずのキャラが女子になってて、ヤンデレ化しているからだ。

「なんでこうなった……」逆にこちらが聞きたいくらいである。by 作者。

彼は好きなダーク系ライダー（仮面ライダーアマゾンスのオリジナルフォーム）の力とオリジナル死ぬ気の炎と匣兵器を転生特典に選んだ。

そうしたらこうなった。

イミがワカラナイ状態である。

だがしかしこの少年、鈍感であり天然ジゴロであるのだ。というか転生した際になぜかは分からないが前世の記憶（最新まで）はあるのにもかかわらず重要なその原因の記憶がないのでまるっきし「オリジナルした緑谷」となってしまったのだ。

とにかく頑張れ！オリ主君！by 作者。

そんでもって作者の投稿ペースはクソおっそい。

目次

キャラ設定	1
第一章	
プロローグ	3
第一話	7
第二話 その1	9
第二話 その2	12
第二話 その3	14
第三話 その1	18
第三話 その2	22
第三話 その3	25
第二章く雄英入学からUSSJまでく	
第四話 その1	29
第四話 その2	33

キャラ設定

オリ主

名：緑谷 出久（男で憑依転生者）

転生特典：① 仮面ライダーアマゾンズ（デメリットなし）でオリジナルフォームのアマゾンゼータ（色はαよりだけど模様が緑ではなくダークグリーン。）ドライバーはネオoverと通常verのものがあがるがオリ主君はネオoverの方をよく使っている。

② 死ぬ気の炎（オリジナルの天空の炎（大空十晴のミックス）でハイパーモードになれば、匣兵器もオリジナルの「天空鷹（名はエアル）」（見た目のイメージは考え中by作者）

容姿：髪はもさもさヘアではなくスタイリッシュ？なツープロツクで、顔にそばかすはなく、目つきはちよつとキツめで、瞳の色はダークグリーンで体つきは引き締まった細マッチョ。ちなみに伊達メガネ（縁の色はダークグリーン）をしていて顔立ちはもろFateの遠野さん。

性格：ちよつとダークヒーローよりの原作。ちなみに一人称は変身したり興奮しているときは「俺」だが普段は「僕」です。

個性ではない能力として転生特典が発現。（アマゾンズは「超細胞」扱いで。死ぬ気の炎は潜在能力扱いとなります。）ちなみにネオドライバーはサポートアイテム扱いなので違法扱いはされていない。

個性：フルカウル（最初から30%）

ヒーローコスチュームの見た目・・・イメージとしてはFateのアーチャー（無銘）のアンダースーツにフルガントレットモードキミアアンソールに深紅のコート（夏は涼しく冬は暖かい優れもの）を羽織っている。顔もとには黒い狐の面（アイアンマンみたいなシステムはないけど可変式）がある。（オーバースペックな身体防護機能全部あります。）

ヒロイン設定

名：爆豪 夏月（なつき）（女）

容姿：Fateの桜の髪の色がプラチナになり、ストレートロング。目つきも桜。瞳の色は明るいルビーで体つきはいわゆる「発育の暴力」である。

性格：原作の正反対です。けどあかるい感じ（言ってしまうと芦戸と緑谷の性格を＋して割った感じ）けど依存系ヤンデレ（依存系になった理由は後ほど判明させます。by作者。）ちなみにオリ主君が伊達メガネをしているので「私もつける」となり、縁がダークレッドのものをつけている。

個性：膨張と凝縮

ヒーローコスチュームの見た目・・・イメージとしてはstaynightのイリヤのコート（夏は涼しく、冬は適温に保ちます。そんな優れたもの。で色は藍色）を羽織り、あとは、防弾、防刃、防火、防寒、防水、防電、まあ言ってしまうえば身を守るための機能全てつき込んでいるスタイリッシュなスーツを着ている。顔もとには黒猫のお面がある。

第一章 プロローグ

??? side

「ふわあ・・・よく寝た・・・ん？ここどこだ？僕、家で寝てたよね？」

女大天使

「あなたは死んでしまったのです。私のポケナスでアホな上司のせい
で・・・」

???

「はい？えくと詳しく聞いても？」

女大天使

「いいですか？あなたは生前、『異世界に転生できるならやつてくれたらなくでも神様なんていないだろうし無理か・・・』とよく疲れた時にボソツと言っていましたよね？それを聞いた私のポケナスでアホな上司、つまりはGODですね。がムキになって『転生させよう！特典は彼が望んだやつ2つね！あとは、任せた！』といいあなたをピーしてしまっただです。」

???

「なるほど・・・苦勞してるんですね・・・じゃあ、特典なんですけど。仮面ライダーアマゾンズ(デメリットなし)のオリジナルのやつと死ぬ気の炎(オリジナルの天空の炎(大空+晴のミックス))でハイパーモードになれば、匣兵器もオリジナルの「天空鷹(名はエアル)」ってできますか？」

女大天使

「はい、可能ですよ？世界はどうしますか？」

???

『僕のヒーローアカデミア』の世界でよろしくお願いします。あ、性格なんですけどキレたら僕、じゃなくて俺に一人称変えることも出来ますか？もしこれも特典に含まれるのでしたら別にいいのです
が・・・」

女大天使

「いえ、それは含まれませんよ。」

???

「良かった〜！ありがとうございます〜！」

女大天使

「ついでに性格とかその他もろもろ癖なんかも少しいじっておきますね。ヤンキーにはならない程度に。」

???

「何から何までありがとうございます。それとポケナスでアホな上司さんに『部下は大切に扱ってください！』って言うておいてくださいね。」

女大天使

「はい♪それでは良き第二の人生を！」

オリ主君、転生し誕生！（細かく書くの大変なのでカットします！あと戦闘描写を書くのは苦手なのでクソみたいな感じにはなると思っていますのでそのところもよろしくお願いします！by作者）

〜転生してから5年後〜

出久（オリ主君）

「いやはや、まさか主人公になるとはな。つーかなんか口調も変わってないか!? まあいいか。今日は原作では個性判別の日でもあり俺が無個性診断が下されるんだよなまあ、でも無能力者ではないから何とかなるか。」

〜病院にて〜

医者

「お母さんに言うておくことがあります。息子さんは無個性ですが・・・何らかの『能力』が2つ宿っています。これは非常にとてつ

もなく非常に珍しいケースです。いままで聞いたことはありません。」

引子

「何らかの『能力』が2つもですか？具体的にはどんな『能力』が出久には宿っているんですか？」

医者

「まず、体の細胞が普通の人間の細胞とは違います。ですが・・・このパターンは異形型の個性と同じパターンです。2つ目なんですが出久君。少し目を閉じて集中してみてくださいるかな？」

出久

「はくい。スツ ボウツ」

医者

「とこのような超高密度のエネルギーを持っています。これは個性と言ってもいいのかわからないのですが私たちとしては認めたくないのも事実・・・ですが『無』個性ではないので一応個性として届出をだしてよいでしょうな。」

出久

「(医者でも認めたくないこととかあるんだなそりやそうだ、いままでこういったパターンの人間いなかった感じだしな。)」

引子

「無個性ではない・・・ということでしたら良かったです。息子はヒーローになるのが夢ですから。」

医者

「そうですね。しかし息子さん、超高密度のエネルギーを出している際にほんの少しテスト問題をさせてみたんです、そうしたらですね。全問正解だったんですよ。これは脳のリミッターを解除し、100%の力で使用していると見ていいでしょうな。しかも両方とも発動型なので特訓などをすればこれは、強いヒーローになれるでしょうな。」

引子

「そうですね。長居する必要がないのでこれで、失礼しますね。あなたの目が実験材料を見るかのような目で家の出久を見ているような気がするので、さようなら。」

出久

「じゃあねーバイバイ！」

く廊下にて(声をわざと大きく)『お母さん。もうあの病院行きたくない。なんかこわかった。』『そう？なら今度から別の病院にしましやうね。』というやり取り、く

次回に続く(?) by 作者

第一話

出久

「ふう、とりあえずは一応「個性」ではなく「能力」として認められたっぽいな。と言うか原作とはここから大きく変わってく感じかね。ん？手紙？こんなのあったか？んん何々？

く女大天使く

「どうも、あの時担当したものです。本つ当に申し訳ありません！転生特典は問題なく使えます。ですが・・・私のポケナスでアホな上司が『おい！あの転生特典はなんだ！こんなんじや彼、物足りないだらう！そうだ！彼、確かF a t e好きだったよな！ならその特典にちようどいいサーヴァントの力をやろう！えくとそれじやあクラスはバーサーカーでランスロットとヘラクレス、この2人の宝具と能力をやろう！うん！それじやあそのことについてはお前が連絡しとけよ！任せた！』というわけでして・・・はあ。そういう事でああなたは『騎士は徒手にて死せず(ナイトオブオーナー)』と『十二の試練(ゴッド・ハンド)』と『射殺す百頭(ニンライブス)』『己が栄光の為でなく(フォー・サムワンス・グロウリー)』のこの4つの宝具とそれに付随する能力が段階的に使えるようになります。『十二の試練(ゴッド・ハンド)』に関しては常時発動のパッシブスキルとでも覚えておいてください。ほかの宝具を開放する際や確認したいことなどがあれば私が『大天使による転生者後続サポートシステム』のあなたの担当になったので連絡をください。」

(^ ω ^)・・・こんなんチートじゃねえか!?はあ!?
ちよい待ち、はあああ、これももう速攻で連絡することになるたあな。
担当さーん!」

女大天使

『はい、連絡があったということは・・・読まれたのですね・・・こ

れあなたの視点から見てどう思いますか?』

出久

「言わなくてもわかるのでは? (今は前世の口調に戻ってますね。まあ、いいでしょう。)これ相談なんですけどストックを他人に渡せるようにすることってできますか? 多分あなたのポケナスでアホな上司なら可能だと思うのですが・・・というかできるようにするようになってくれないか? もし上司さんが断ったら・・・あなたのミスを日本神話の神がいるはずなのでそのアテに言いに行きますよ」って言っていたと言ってください。」

女大天使

『はい。わかりました。ではすぐに実行しますね。あ、私が言う時少し脅す感じでもいいですか?』

出久

「はい、そんな感じでいいです。」

女大天使

『完全にそうなるまでに予想される期間は最低でも2日はかかりますね。』

出久

「わかりました。では2日後にまた・・・」

女大天使

『それでは私は・・・ちよつと提案兼説教兼脅迫に行きますか・・・』

? これらはすべてオリ主君と念話で行われています。(女大天使との会話) そんなでもって手紙は読み終わったあと消えました。by作者。

次回へ続く!?

第二話 その1

出久

「ふあああ、もう朝か。昨日は病院行って個性モドキ判断されて役所行って・・・つーか今日、ヤバくね？原作もう既に結構改変してるんですけど・・・まあどうにかなると思うしかないか。」

引子

「出久く、朝ごはんよく。」

出久

「はくい！（とりま、どうなるかなんてわからんがやるしかねえか）」

く朝食eat中く

引子

「出久？今日から保育園だけとあまり見せびらかしたりしちやダメだからね？」

出久

「わかったよ。ママ。」

引子

「それじゃあ、行こうかな。出久？ちゃんと準備出来てる？」

出久

「うん！（マジで保育園児のフリすんのか、ヤベえメンタルすり減りそう）」

女大天使

『出久さん。2日もかからずにいけました。そしてなんです。スツクの譲渡に合わせて宝具はランク6分弱体化されています。『十二の試練（ゴッド・ハンド）』は常人の3倍程度の治癒力に、『騎士は徒手にて死せず（ナイトオブオーナー）』は手にしてから1日以上の間で宝具モドキにできるように、『射殺す百頭（ニンライブス）』は格闘系技能を20%全て使えるように、『己が栄光の為でなく（フォー・サムワンス・グロウリー）』は黒い靄でしたがダークグレーの霧みたいな感じで身を隠せる程度になっています。』

出久

『わかりました。それにしても早かったですね。』

女大天使

『貴方の脅し文句がグサツと精神に刺さったようでしてね。それはもう、大急ぎでやってました。』

出久

『そうですか。それは良かったです。もしよければこれからもその脅し文句使っていいですよ？僕には特に何のデメリットもないので。』

女大天使

『ありがとうございます。ではこちらへんでリンクは切りますね。また何かありましたら連絡ください。』

出久

(ふう、どうやら完全なチートは回避されたな・あとは行ってみないと分からない要素が多いからな。気を引き締めないと・・・)

引子

「出久。ついたわよ？それじゃあ組のみんなと仲良くね。」

出久

「は〜い！(さて、どうなることやら・・・ん？あそこにいる金髪の女子は・・・まさかな・・・とりあえず確認しないと)おはよう！はじめましてだね。僕の名前は緑谷 出久。君の名前は？」

???

「私？私の名前は爆豪 夏月。こちらこそよろしくね。出久君！」

出久

「(マジかよ・・・爆豪が原作主人公のライバルがTSしてるとは・・・しかも名前も違うし！ってことは・・・)呼び方、夏月ちゃんでもいい？」

夏月

「うん！じゃあ出久君はいつくんでもいいかな？」

出久

「いいよ！(マジか・・・まんま逆じゃねえかこっちが名前呼びで、あつちがあだ名呼びとかさ。あくあ、まくたあのポケナスでアホな上司持

ちの女大天使さんに連絡しなくちゃいけないこと増えたよ・・・これ、原作大丈夫か?)ねえ。夏月ちゃんの個性ってなんていう個性なの?(これにかけるしかない!もし個性まで違ったら、これもう原作改変じゃ済まない案件だぞ!)」

夏月

「私の個性?私の個性はねえ(この時めっちゃオリ主君の心臓がドツクンドツクン言ってますby作者。)凝縮と膨張!いっくんの個性は?」

出久

「僕はちよつとトクベツでさ。病院の先生には個性じゃなくて能力だつて言われたんだよ。(マジでか!凝縮と膨張!?ようするにブラツクホールモドキ作れんのか!?ヤベえこりやあ原作崩壊間際の改変されてら・・・(?▽?;)ハハハ。)だから言っちゃえば無個性みたいな感じなんだよね。」

夏月

「個性じゃないチカラ!?何それすごい!むしろ個性よりもすごいよ!あつそうだ!じゃあこのことは先生は知ってるの?」

出久

「(罵倒されない!?!むしろ興味持ちちゃったよ!)ううん。だからこのことは僕と夏月ちゃん、(ここから夏月ちゃんの依存というか執着が始まりますby作者。)二人だけの秘密だね!(この言葉が夏月ちゃんの頭の中で「二人だけ」の部分が1000回ほど反芻されています。この間なんと0.1秒by作者。)」

後編へ続く!

第二話 その2

夏月

「(私といっくんだけの秘密・・・フフフ♡♡) そつかあ、私たち二人だけの秘密を持った特別な友達だね!」

出久

「(ん? なくんかところどころ強調した感じがしたが・・・まあいいか。) そうだね。でもお母さんは『友達はね、何人いてもいいものなのよ?』って言ってたけど秘密があるのは今のところ夏月ちゃんだけだね。」

夏月

「(ふくん。なるほどねえ、フフフ♡♡ 『今のところ』ねえ。そつかあなら私の正体は隠しててもいいかな。) いっくんの将来の夢ってなに?」

出久

「僕の将来の夢? (うくん。ここは原作通りに言った方がいいか?)」

偽善の英雄
『ヒーロー』かな。」

(ナレーター)

(はい。ここで突然ですがナレーター登場!なぜオリ主君は『ヒーロー』偽善の英雄』と言ったのか?説明しよ〜と思えます!ま、作者に『活動報告に書くのがちよつとめんどいからナレーター!説明任せた!』って言われたなんて言えんよな・・・そう!オリ主君。転生前はヒロアカ並びに漫画大好きなオタク君でした。ふと思っただけです。『ヒロアカのヒーローってどこか『ヒーロー』じゃなくて『仕事としてのヒーロー』になってる感じがするんだよなあ。うくん、ステインが言っただけで政府の都合よく改ざんされてるよな。これ。これじゃあ裏でヴィラン連合とか異能解放軍とかと繋がっててもおかしくないよな。いし『個性の相性』なんかで押し付けたあたりなんぞはしないよな〜』と。つまりオリ主君は『ヒーロー』って『なりたくないから』なれる訳じゃなくて、なんかこう、もつと大事なことを忘れてるんじゃない?』と考えたのである。そしてオリ主君は Fate のサーヴァントでは

アーチャー好き。つまりアーチャーの考え方も含んだことで『ヒーロー』偽善者&救済者』となったわけです。以上、時々作者代行で解説枠として登場するナレーターでした！作者さん！夏月ちゃんの件いつキヤラ設定のところに乗せます？出来れば早めにお問い合わせくださいね。説明するのワタクシですので。」

出久

「（なんか説明された感じがする・・・まあいいか。）夏月ちゃんは？」

夏月

「私？私もね〜『ヒーロー』かな。私の目指す目線は『エンデヴァー以上オールマイト未満』の女ヒーローなんだ！（追加で『いっくんの嫁になる』ってこともあるんだけどねフッフッフ〜）」

出久

「（うおっ、なんかぞわつと来た。何だったんだ今のいや〜な感覚・・・）そっかあ、じゃあお互い、頑張ろうね。」

夏月

「うん！」

次回へ続く！（その3へと）

第二話 その3

〜後編その1から少くし時間が進み中学3年つまり原作開始の時（オリ主君全然少どころじゃないけどな!?!）（夏月ちゃん）まあまあいいじゃない。）（この子達なぜここに!?!by作者。）〜

出久

「フウー… 今日の朝トレ終了! さてと母さん起こす前に朝メシ作りますか。〜クツキングNOW〜うん! いい感じだな! 母さ〜ん! 朝ご飯できたよ〜!」

引子

「んん… ふあああ（〜ん、）おはよう。 出久。」

出久

「おはよ、母さん。今日は「ホテルの朝食」をイメージして作ってみたんだけどどうかな?」

引子

「うん。おいしい。それにしても出久の得意分野に『料理』が来るとはねえ? お母さん予想できなかったよ。」

出久

「ハハハ。（前世、料理を趣味で時々やってて良かった〜!）あ! 母さん。もうそろそろ時間だから僕、行くね!（今日か:あのヘドロヴィランに襲われるのは。氣い引き締めないとね。）あ!もしかしたら今日帰るの遅くなるかも!」

引子

「あら。今日何か学校であるの?」

出久

「ん。ちよつとね。それじゃあ行つてきます!」

引子

「いってらっしやい。」

出久

「とりあえず今日はいつでも変身できるように70%ぐらい開放しとかか…ズズズよし、あとはバレないことを祈りますか」

く学校にてく

教師

「一応進路希望の紙を配るけど、皆ヒーロー科志望だもんな。そうですっていう人個性使わないで手あげてくれ。」

クラスメイト（出久&夏月以外）

『はくい!』×28

教師

「うん。案の定個性使ってるな。（呆れ）」

夏月

「先生。私、みんなとはちよつと違う進路のはずです。」

教師

「あくそつだったな。爆豪、雄英受けるんだったか。あと緑谷もだつたよな?」

出久

「はあ(*、口、)。先生なにばらしてるんですか?他言無用つて言いましたよね。俺」

教師

「お、おう。とりあえず落ち着け緑谷。」

夏月

「先生じゃ無理ですよ。いっくん。こつちむいて?」

出久

「ああ!?(怒)ん!」

クラスメイト（女子組）

『キヤアアアアア（黄色い悲鳴）』

く夏月がしたことそれは・・・キスである！（クソツたれ!書いてるの自分のはずなのにこの言葉しか浮かんでこない!それではみなさんご一緒に、『リア充爆発しやがれこんちくしょう!』by作者。）く

出久

「プハッ。夏月!」

夏月

「もう。いっくん。そうキレないの。私だつて恥ずかしいんだからね

？」

出久

「すまん。けどよ？なんで1分半もする必要があった？」

夏月

「っ！時間は別に関係ないでしょ！もう！」

クラスメイト全員&先生の思っていること

『時間測ってたんだ・・・』

教師

「んん！とりあえず進路先に向けて勉強頑張るように！いいな！」

クラス全員

『はい！』

〜放課後〜

原作爆豪替わりのモブキャラ

「オイ！緑谷！ちよつと話いいか。なに、直ぐに済むことだからな。」

出久

「別にいいけど？ていうかそんな感じしてたから親には少し遅れるって言ってるから。」

原作爆豪替わりのモブキャラ

「フン！じゃあいいか。ならよ？俺の言いたいことわかるよな〜?!」

出久

「まあね。どうせ『無個性のてめえがなんで雄英受けて俺が無理なんだよ!?普通違えだろ!?無個性は無個性らしく俺らのいうこと聞いてりゃいいんだよ!』こんな感じ? (*、旦、) はあ」

原作爆豪替わりのモブキャラ

「んだよ？文句あんのか無個性のくせによ!?ああ!?!」

出久

「いや〜こんなことしてるくらいなら勉強してればいいのにね。あと、これだけは言っておくよ。俺に喧嘩売ったことあとで後悔するんだな

それじゃ僕は合格するために勉強しなきゃいけないから帰るね」

モブ

『!!』

く出久帰宅中く

(ナレーター)

(作者からの伝言です。一旦先にモブキャラの方から書きます。なんでナレーターなのに伝言伝えなきゃいけないんだ)

モブ

「クソツッ!何なんだよアイツ!無個性のくせに!『合格するために勉強しなきゃいけないから帰るね』だあ!?!ふざけんじゃねえよ!爆豪さんもそうだ!なんであんな無個性野郎なんかと一緒にいるんだよ!?!あ〜!イラつく!無個性野郎なんかより俺の個性の方が強えつーの!」

くここでモブキャラの個性について説明。モブキャラの個性は『火炎』読んで字のごとく火を出したり燃やしたり出来る。というものである。このモブキャラは強個性だからなのか親に甘やかされて育ったため原作爆豪替わり(原作よりもクソみたいな感じにした自己中野郎でその思考は『無個性は奴隷!弱個性はザコ!強い個性持ちこそヒーローになるべき!そんで俺こそがトップオブトップの男!』という原作爆豪の方がマシに見えるレベル。)として登場したのだ。ちなみに作者曰く「このキャラヴィランにしよ」となったらしい。く

モブ

「ああ?なんだこのペットボトル?なに入ってんだよ気持ち悪っ」

(ここでオリ主君サイドに戻りまくす!というか次回へ続く!by作者。)

第三話その1

出久

「はあくとりあえず、あんのクソ野郎にはいつか絶望的な状況つてのをぶつけるしかねえかもな・・・めんどくせえけど。」

ヘドロ

「フフフ・・・Lサイズの隠れ蓑・・・見つけた・・・」

出久

「っ!?(しまった!油断してた!っ!かこれあのヘドロか!)なんなんだよ!一体!クソツ離れろ!」

ヘドロ

「フフフ・・・無理だよ。俺は流動体なんだ。つかめるはずないだろう?」

出久

「(クソツタレがここでストック消費することになんのかよ!いや。待てよ?原作だと確か・・・)」

くマンホールドーン!そしてオールマイイト登場!く

オールマイイト

「ハツハツハ。慣れない町だったもんだからちよつと迷っちゃったな。けど!もう大丈夫!なんでって?私が来た!TEXAS:SMA SH!!」

く一撃、それも直接当ててすらいない殴っただけの風圧でヘドロヴィランを吹き飛ばした。く

出久

「はあはあ。助かりました。オールマイイト。」

オールマイイト

「ハツハツハ!気にするな少年!これは私の不手際だからな。それじゃ私は警察にこいつを出しに行かなきゃいけないからさらば!テレビ放映でまた会おう!」

出久

「行っちゃまったな・・・ツーカー待てよ!?!そいやあこの後原作じゃあ・・・」

ヤベツ」

くボーン!く

遅かったか・・・オイ!おっさん!何があった!」

おっさん

「ああ。今さつきな?あそこにいるのが見えるかい?あのヘドロヴィランに捕まっている少女の個性が強くてな。ヒーローたちが手出しできない状態なんだよ。」

出久

「(少女!?今までの流れだとあのヘドロにつかまんのは爆豪モドキのやつのはず。) あんがとな!おっちゃん!」

おっさん

「ああ。?どこに行くんだ?」

出久

「ん?なぐに。おっさんには関係ねえよ。」

おっさん

「そうか?ならいいんだが。」

くシーンが変わり変身シーンへとく

出久

「フウー...まさか...最初の変身が今日になるとはな...しゃあねえか。こい。ネオドライブバー。(シユルルル)『NEO DRIVE RESET UP』(ブウウウン)『SYSTEM ALL CLEAR STAND BY』さあて、仮面ライダーとしての初陣だ!変身!『CHANGE ZETA』(効果音のイメージはカブトです。)

『さあ、救済&デストロイタイムだ!』

おっさん含め一般人

『なんだ!?援軍のヒーローか?』

『!?!』

く(はい!作者タイム!オリ主君が変身しているときはゼータと一人称を変えさせてもらいます!そんでもって変身しているときは『』のかっこでセリフをつけさせてもらいます。ですが...システム

音の時もこれなのでシステム音のやつは変更しますね。見づらいつ
思うので。）」

ゼータ

『仮面ライダーアマゾンゼータ。ここに推参。ヒーロー、助太刀しよ
う』

ヒーロー（デステゴロ）

「あ、ああ。助太刀感謝する。後で話を聞くことになるがな。」

ゼータ

『フツ。それはないだろう。このことはすでに動画として挙がつてい
るはずだからな。それはそれとして、さあヘドロよ。覚悟するとい
い。貴様の自由な行動（犯罪）も今日までだ。』

ヘドロ

「はっ。俺は流動体なんだよ。つかめるはずないだろうっ？」

ゼータ

『それはどうかな？』《COOLING ARMOR ON》『これでも俺
が触れないとでもっ？』

ヘドロ

「っ!? てめえまさか……」

ゼータ

『さあ、貴様の罪、貴様自身が今、償い。そして後悔するといい。この
俺に出会ったことを……COOLING BREAK』（技のイメー
ジは凍らせてからのカブトのスマートライダーキックと違ってくだ
さい。そんでもって少女にはなんの問題もなし！ by 作者。）

ヘドロ

「グギヤアアアアアア！」バリーン

ゼータ

『もう大丈夫だ。安心したまえ。（やつぱり夏月じゃねえか！ どう
なってんだ？ あの爆豪モドキはどこ行った？ まあいいか。』

夏月

「あ、ありがとうございます。（ポク）」

ゼータ

『礼はいらんよ。それでは俺はこの辺で去るとしよう。』

『ヒーローとは自身の相性関係なくヒトを守り、救うものであると俺は思っている。それすらも出来ていない貴様らにヒーローを名乗る権利はないと思った方がいいだろう。』

ヒーロー&一般人

「・・・」

ゼータ

『では、さっさと去らばだ。』

第三話その2

ゼータ

『フウー…： 変身解除』《ZETA SYSTEM UNLOCK》(プシユ〜)

出久

「ああ〜疲れた。それにしてもやり過ぎたか？まあいい。言いたいことはまだあるから、また今度だな。」

オールマイルト

「わくたくしくが〜マスコミから超ダツシユでにげてここに来たあ！」

出久

「っ!?オールマイルト!?なんでここに？」

オールマイルト

「少年だろう?さっきのあの『仮面ライダー』という人物は」

出久

「っ?!いやだな。僕がああ『仮面ライダー』?違いますよ。」

オールマイルト

「いいや、私の長年の経験からくる勘が言っている。キミがああ仮面ライダーだと!」

出久

「これ以上、何を言っても無駄か…そうですよ。僕がああ仮面ライダーの正体です。」

オールマイルト

「やはり、そうだったか!」

出久

「それで?僕を警察に突き出すんですか?いいですよ?オールマイルトの評判が落ちてもいいのならね?」

オールマイルト

「ハッハッハ!キミを警察に突き出す!?とんでもない!私はキミのことを認めているのさ!」

出久

「『認めている』？何を認めているんですか？」

オールマイト

「キミはなんのメリットもないのに先ほど変身(?)して彼女を救出した！その行為をだよ！」

出久

「そりやどうも。ですが・・・ナンバーワンヒーローがただそれだけのために僕の目の前に来るはずないでしょう？」

オールマイト

「ハッハッハ！その通り！キミにはトクベツな事情があるようだね！その事情この私にも聞かせてくれないかい。」

出久

「(*、口、)はあ別にいいですけど他言無用でお願いしますね。オールマイト」

オールマイト

「ああ！」

出久

「僕は『無個性』なんです。けど、『個性』とは違う『能力』が何個か僕には宿ってます。あの変身はその能力の一つをこの『ネオドライブ』で活性化、そして纏ったんです。」

オールマイト

「なるほど、だが・・・キミはそれでもなりたいのだろうか？ヒーローに！」

出久

「ええ。僕がヒーローになり、今の個性至上主義な社会を変えたいんです。」

オールマイト

「それなら、私がキミに言えることはただ一つ！キミはヒーローになれる！そして夢をかなえる権利がある！」

出久

「っ!!そうですか。それで？話はまだあるんでしょう？早めに済ませ

て欲しいんですけど。」

オールマイト

「ハッハッハ！そう慌てるな！キミのその肉体はキミが今まで鍛えたのかい？」

出久

「そうですけど。それがどうかしましたか？」

オールマイト

「キミには私の『個性』を受け継ぐに値する権利がある！」

出久

「オールマイト。いきなり「キミには『個性』を受け継ぐ権利がある」って言われても「いらなくなっただからこれやるよ」みたいなテンションで言われても意味わからないんですけど。」

オールマイト

「ハッハッハ。これは、失敬。私の『個性』は聖火の如く引き継がれたもの。個性を『譲渡』する個性。その名は『ワン・フォー・オール』それが私の『個性』さ！」

く（さあ、ついにオリ主君がワン・フォー・オールを継承します！ですが・・・それは次回その3へ続く！by作者。）く

第三話その3

出久

「なるほど・・・『譲渡』可能な『個性』つまりは、それまでに蓄えられた純粹な力が継承されていくことに力が増していった。そういうことですね？オールマイト。」

オールマイト

「ハッハッハ！その通り！1人が力を培い、その力を1人へ譲渡。その1人が更に力を培い、また新たな1人へ譲渡。この繰り返しにより、極限まで磨き上げられた、それこそが『ワン・フォー・オール』！そして次の後継者を探していたところに緑谷少年！キミが現れた！そして私は感じた！キミを後継者にすべきだと！」

出久

「ハハハ（苦笑）・・・それで？継承するにはどうすればいいんですか？まさかとは思いますが『食べ』なんてまた理由の説明もせずにもりじやないですよね？」

オールマイト

「ギクツ・・・ハッハッハ！ちゃんと説明するから落ち着き給え！『ワン・フォー・オール』を譲渡する為には、譲渡したい相手に自分のDNAを摂取させる必要があるのさ！だからね手段としては髪の毛を食ってもらえばそれでいいんだよね。」

出久

「なるほど・・・わかりました。ではいただきます。」

オールマイト

「2時間もすれば、髪の毛が消化されて変化が起きる筈さ。」

出久

「2時間ですか・・・なら明後日ゴミのたまり場でもいいですか？継承するのって」

オールマイト

「ふむ、確かにそうだね！よし、なら明後日の早朝ゴミのたまり場で待って居よう。」

出久

「もちろんですがトウルーフオームで待っててくださいね？」

オールマイト

「ああ！それでは！また明後日会おう！」

〜二日後の朝早朝〜

出久

「さて、オールマイトはどこにいるか・・・」

オールマイト

「緑谷少年！こつちだ！」

出久

「おはようございます。オールマイト。」

オールマイト

「おはよう！早速だが・・・」

出久

「いいですよ？そのためにわざわざスポドリ買ってきたわけなんで。」

オールマイト

「準備万端というわけか！それでは継承式だ！『食え！』」

出久

「(原作でもオールマイトは感覚系だったからな・・・特訓しといて良かった。)」

オールマイト

「2時間もすれば、髪の毛が消化されて変化が起きる筈さ。それまで、辺りを走るなりして体を温めておくといい」

出久

「はい。」

〜オールマイトの指示に従い、ランニングなどで時間をつぶしているとき、《それは突然きた。》

オールマイト

「フッフ・・・来たか！緑谷少年！キミが纏っているエネルギー、それこそが『ワン・フォー・オール』だ！」

出久

「これが『ワン・フォー・オール』…なるほど…なら…全身に纏うかのようにエネルギーを循環させて…完成だ。『ワン・フォー・オール：フルカウル』」

オールマイト

「緑谷少年！まさかこれほどとは！正直、予想以上だよ！」

出久

「予想以上って…オールマイトの予想では何%ぐらいだったんですか？」

オールマイト

「そうだね。私を100%としたらキミは10〜20%あたりだと思っていたよ。」

出久

「それで？実際に見てみて感じたのは？」

オールマイト

「25%以上だと思うな。いやはや、私も盲点だったよ。」

出久

「それはともかくとして、指導者としての才能には疑問符が付きますね。指示が感覚的過ぎるといふか、擬音語に頼りすぎです」

オールマイト

「グハツ。」

〜オールマイト復帰中〜

オールマイト

「じゃ、じゃあ、これからキミにやってもらおう事を伝えよう！内容は簡単！個性を使って、このゴミの山を綺麗にするのさ!!」

出久

「ゴミ掃除ですか。たしかにこの辺りは海流の関係で漂着物がやたら多いし、それに付け込んだ不法投棄も多いですけど…なるほど…ゴミ掃除をすることで全身をさらに鍛え、体に『ワン・フォー・オール』をなじませると…」

オールマイト

「それもそうだが。ヒーローってのはね基本的には『奉仕活動』みたい

なもんなのさ。最近のヒーロー若いは『派手さ』『強さ』を求めるけどね。違うんだよ。だから、緑谷少年にはこころ一帯の水平線を見渡せるようにする！それがキミのヒーローとしての本来の『第一歩』だ！」

出久

「はいー！」

(はいー！作者タイム！です。原作では10カ月かかりましたが今作の緑谷君(オリ主君)はその約4分の1のスピードで終わらせたので・・・原作よりも%は上がってるし尚且つ『纏う』だけでなく体に流れる血液のように循環させることで『ワン・フォー・オール：フルカウルスピードスタイル』というスピード重視のフォームと『ワン・フォー・オール：フルカウルノーマルスタイル』(原作のやつ)そして『ワン・フォー・オール：フルカウルオールレンジバトルスタイル』という全距離対応タイプの戦闘スタイルの3つを習得した。のであるマジヤベエ)

く次回ついに雄英入学編突入！続く！by作者。く

第二章く雄英入学からUSSJまでく

第四話 その1

出久

「“個性”をフルに使つての特訓を開始して4ヶ月、原作だとあと3日で雄英入試か・・・）今日の特訓はこんなもんかな・・・」

オールマイト

「H A H A H A！やってるね！緑谷少年！調子はどうだい！だいぶ慣れてきたって感じかな！」

出久

「ええ。それにしても、なんで『アレ』を使つて試験に挑めなんて言つたんですか？」

オールマイト

「H A H A H A！それは簡単な事さ！緑谷少年のその力は一応は『個性』という風になっているのだろう？ならO F Aだけ使つて合格しても意味がないと思つたのさ！だから緑谷少年にはキミのその力とO F Aを組み合わせた方法で特訓してもらつていたというわけさ！」

出久

「なるほど・・・」

オールマイト

「それでだ！緑谷少年には雄英高校入試では成績上位で合格してほしい！」

出久

「フツ。オールマイト。成績上位？舐めないで頂きたい。主席合格してみせますよ。」

オールマイト

「見据えていたのは、遙か先…か。H A H A H A！頑張り給え！緑谷少年！いや！次代の平和の象徴！」

出久

「ええ！」

くそして、3日後。試験当日の朝。く

夏月

「ねえ。いつ君。」

出久

「なんだい？夏月ちゃん。」

夏月

「最近さ、いつ君なんか特訓してたみたいだね。」

出久

「ああ。ちよつとね、」

夏月

「ふくん？じゃあなんで私も一緒に特訓できなかつたの？ねえなんで？ねえ？」

出久

「！（ヤベエヤンデレった！）夏月。」

夏月

「？なに？んむ！」

出久

「僕は君を入試まで傷つけるわけにはいかなかったんだ。だからこれで許してくれるかい？」

夏月

「（。D。）くうん♡じゃあ試験後一緒に帰るっていうのもプラスしてくれるなら許してあげる♡」

出久

「ああ。それぐらいならいつでも一緒に帰ってあげるよ。」

引子

「はいはい。二人ともそれくらいにしとくの。試験に遅れちゃ意味がないでしょう？」

（ここで作者の説明タイム！実は夏月ちゃん。あの事件のあとから緑谷家に住んでいます。なぜなら出久が一日一回はキスをしないと体が震えたりしてしまうからである。なの入学後には2人暮らしをすることになるのである。以上作者の説明タイム！でした）

出久

「あーごめん母さん。夏月！急ごう！」

夏月

「うん！」

く雄英正門前く

そして実技試験。

プレゼントマイク

「今日は俺のライブにようこそー!! エヴィバデイセイハイ!! こいつあシヴィー!! 受験生のリスナー! 実技試験の概要をサクツとプレゼンするぜ!! アーユーレディ!?!」

シーン・・・

プレゼントマイク

「さああてー!それじゃあ説明していくぜええ!1おつ!制限時間10分の間に、市街地を模した演習場で仮想敵ヴィランをぶったおせ!

2あつ!仮想敵ヴィランは強さに応じてポイントが割り振られた3タイプが多数。それに加えて、妨害用の大型タイプが1体だけ存在するから気い付けな!。

3いっ!他人への妨害などアンチヒーローな行為はご法度。こいつあそのまんまだ!

4おつ!、アイテムの持ち込みは自由。

これでレクチャーは終わりだあ!質問はあるかい!ベイビー!」
???

「質問宜しいでしょうか!」

眼鏡をかけた七三分けの少年が拳手をしてOPについて質問した。
プレゼントマイク

「受験番号7111君、ナイスなお便りサンキュー!皆は、レトロゲーのスー○ーマ○オブラザーズってゲームやったことあるか!?あれで言うドツ○ンみたいなものさ。各会場に一体、所狭しと暴れ回る”ギミック”よ!リスナー諸君には、避けて通ることをオススメするぜえ!」

???

「ありがとうございます！」

出久

「さて・・・行きますか。そうだ。夏月。ちよつとこつちこい。」

夏月

「？」

出久

「チュ」

夏月

「！いよゝし！やる気出てきた！」

出久

「頑張つてね。」

　　くさあ始まった！次の話ではついにオリ主君が無双します！しかも別のフォームも登場させる予定なのでこつこつ期待！では続く！く

第四話 その2

出久

「ふう・・・夏月は大丈夫だろう・・・まずは、来い！ネオドライバー！『NEO DRIVER SET UP』『SYSTEM ALL CLEAN STAND BY』変身！『CHANGE ZETA』・・・そして・・・『JET ARMOR ON』さあ、救済&デストロイタイムだ！」

メガネ

「！あれは・・・仮面ライダー!?」

プレゼントマイク

「ハイ！スタート」

ゼータ

『速攻！』

仮想敵

『標的捕捉!! ブツ殺ー』

ゼータ

『うるさい。貴様が壊れる』

耳障りな機械音を遮る形で、すれ違いざまに拳を叩き込み粉碎したのだが・・・

ゼータ

『脆いな・・・』

そう。異常なまでに脆かったのだ。

仮想敵S

『標的捕捉!!』

『標的捕捉!!』

『標的捕捉!!』

すると何かしらの反応を察知したのだろう。近くに潜んでいた3体の仮想敵ヴィランが、俺を囲むように一斉に姿を現し、攻撃を仕掛けてきたのだが・・・

ゼータ

『やかましいわ!』

一撃ずつ叩き込み機能を完全停止させた。

ゼータ

『ふう・・・さて、ジェットアーマーはこの辺りでやめにして・・・モード・アクセラレート』使うか。『MODO・ACCELERATE ON』さあ・・・振り切らせてもらう方がいいな?』

その後、試験会場にてダークグリーンの何かがとんでもない速さで仮想敵をぶっ壊して回ったという・・・(試験者談)

その頃試験官室では・・・

教師達もその多くが口をあんぐりとさせて、画面に映し出されている様子に唾然としていた。これは比喻ではない。実際にそうなっていた。

ミッドナイト

「何よこれ・・・プロヒーロー並みの子がいるじゃない・・・」

イレイザーヘッド

「戦い慣れすぎてるな・・・あのダークグリーンの無双してるやつは・・・緑谷だったか・・・まさか仮面ライダーだったとはな。」

根津

「緑谷君は、件の事件で敵を一撃で倒している張本人だからね。そりゃ強いさ。それに・・・オールマイトの弟子でもあるわけだしね。」

イレイザーの発言を受け、鼠のような姿をした男で、この雄英高校の校長である根津が言った。

彼の言葉に、オールマイトは驚愕しながらツツコむ。

オールマイト

「校長先生!?!その話は内密にするということと通したはずでは!?!」

根津

「ハハハ。こごも無双されちやあ隠しても意味ないと思つてね。」

根津から、緑谷の強さを指摘されればオールマイトも納得せざるを得ず、言葉を呑み込むのであった。

オールマイト

「(さすが・・・緑谷少年は私の想像の遙か先を行ってくれるな!流石十代、若いつていいね!)」

オールマイトは、出久の勇姿を見届けながら喜ばしそうに笑っている。

そして・・・

—— さあ、緑谷少年。君のヒーローとしての本質を見せてくれたまえ!期待してるぜ!——

祈りを込めながら、OPの起動ボタンを押したのであった。(そのスイッチには《YARUKI SWITCH》と書かれていた・・・)

ゼータ

『これで150P・・・か案外脆かったな・・・仮想敵。妥協したくないしな……。もう少しポイントを稼いで……。ツ!?(忘れてた!そういうやそろそろOPくるじゃねえか!)]

ーズゴゴゴ

ゼータ

『いや・・・デカいな・・・!(まあ・・・デカかろうとぶっ壊すだけだが・・・原作だと・・・やっぱり!)]

麗日

「痛っ・・・!わ、私のことはいいから逃げて!このままじゃ、君も怪我しちゃう!」

ゼータ

『たく・・・怪我してんのにほっとくのは英雄ヒーローのやることじゃないだろう?』

麗日

「!」

ゼータ

『さてと、さっさとぶっ壊すとするか!』

『ACCELERATING BREAK NOVA!』

ドゴワシヤアアアン!

プレゼントマイク

「試験終了オオオオオオ！」

出久がぶつ壊すと同時に試験終了の合図が会場中に響き渡り……

『うおおおおおおおおおおおおおおおおお!?』

受験生達から、驚愕と歓喜とが入り混じった声を上げたのであった。(ちなみに割合は驚愕6割、歓喜4割です)

次回に続く！（次回は夏月ちゃんの方の予定です！）